

【資 料】

基礎看護学実習における外来実習の学習成果と課題

砂見緩子, 北村奈津子, 本多和子, 梶原倫代,
高田由美, 村松真千子, 佐藤みつ子, 松田明子

帝京大学医療技術学部看護学科

抄録：

本研究は、基礎看護学実習における外来実習の学習成果を把握し、今後の外来実習のあり方や教育上の課題を明確にしていくことを目的とし、外来実習終了後に提出された看護学生120名のレポートの内容を分析した。その結果、351のローデータが抽出され、『外来看護の役割と機能』、『看護専門職者に求められる知識・技術・態度』、『コミュニケーション技法』、『外来患者の心理』の4カテゴリーに分類された。学生は実習目標に沿った外来看護の役割と機能を学ぶとともに、看護師に求められる観察力と判断力の重要性を学んでいた。また、学生は看護師の行うコミュニケーション技術に着目し、後期に実施される病棟実習への動機づけの機会としていることが明らかになった。学生が実習で出会うさまざまな体験から実感した学びを看護として意味づけ、さらに社会情勢の変化による外来看護へのニーズに気づけるような教育的関与の必要性が示唆された。

キーワード：

基礎看護学実習, 外来実習, 看護学生, レポート

I. 緒言

看護基礎教育における臨地実習は、既習の知識や技術を実際の看護場面で体験する中で知の統合をはかり看護の本質を深く学ぶ機会であり、また、看護実践に不可欠な援助的人間関係形成能力や看護専門職者としての態度を育成する機会としても重要である¹⁾。なかでも基礎看護学実習での体験は、学生にとっては最も新鮮で印象強く、その後の学習意欲や発展性に大きく影響するものであるため²⁾、その体験が学生にとって有意義なものとなるように教育方法や実習環境を整えていく必要がある。

本学の基礎看護学実習では前期（以下、外来実習とする）・後期（以下、病棟実習とする）の2段階を踏んで学習する内容となっている。このうち、前期実習の中に位置付けられている外来実習では、病院および外来の役割と機能について知ることと、外来患者にどのような看護が行われているかを知ることを実習目的としている（表1）。

今回、外来実習終了後のレポートの内容を分析した結果、外来実習での学習内容と、今後の外来実習における教育方法について示唆を得ることができた。

表1 外来実習の概要

※ 外来実習は前期実習の中に位置付けられている。

外来実習期間	平成21年8月18～21日、9月1日～4日のうち2日間
外来実習場所	A病院の10ヶ所の外来
前期（外来） 実習目的	1. 病院および外来の役割と機能について知る。 2. 外来患者にどのような看護が行われているかを知る。
前期（外来） 実習目標	1. A病院の概要と特徴、役割と機能について学ぶ。 2. 看護部の役割と機能、看護部の目標と看護の概要について学ぶ。 3. 院内各部署の組織や役割と機能、及び看護とのかかわりについて学ぶ。 4. 外来における看護の役割と機能について学ぶ。 5. 患者を取り巻く他の専門職者との連携・協働のあり方について考える。
外来実習での 学習内容	1. 外来での看護活動を見学し、行われている看護の役割と機能について知る。 2. 外来患者とコミュニケーションを図り患者を知る。 3. 外来患者や家族の気持ちに気づく。 4. 看護師や他の医療者が患者や家族に対してどのように配慮しているかを知る。 5. カンファレンスに主体的に参加し、外来実習での学びをグループ内で共有する。
外来実習での 学習方法	1. 各外来の状況に応じて臨機応変に、受付、診察室等での見学実習を行う。 2. 各外来の実習指導者が患者を選択し、患者に依頼して同意が得られた場合にコミュニケーションを図る。 3. 患者から許可が得られた場合、待合室から診察、検査、会計、玄関を出るまでの受診過程を同行する。 4. グループ毎に外来実習終了後にカンファレンスを行う。カンファレンスの目的は①個々の学生の体験を共有し、学びを深める、②実習中に困ったことについて話し合い解決策を見出す、③翌日の行動予定の確認をする、とし、学生が主体となり運営する。
前期（外来） 実習記録	1. 外来実習記録として、外来実習の目標や実施内容等を記載する。 2. 前期実習終了レポートのテーマは「前期実習目標がどのくらい達成できたか」で2,000字程度にまとめる。

II. 研究方法

1. 対象

平成21年度に基礎看護学外来実習を履修した本学看護学科2年生145名。

2. 方法

外来実習レポートを本研究資料として使用することに同意の得られた120名の記述内容を分析対象とした。

3. データ分析方法

外来実習レポート120名分を分析対象とし、内容分析の手法を用いて外来実習を通して学んだことを記述している文章を抽出してローデータとし、意味内容の類似したローデータをまとめサブカテゴリー、カテゴリーに分類した。分析にあたり、複数の研究者間で検討することで内容の信頼性と妥当性を確保した。

4. 倫理的配慮

研究者らによって口頭および文書により本研究の目的や、研究協力は自由意志であること、

協力の有無は成績評価と一切関係ないこと、個人が特定できないように匿名性を保持することなどを学生に説明し、書面をもって同意の有無を確認した。

Ⅲ. 結果

外来実習を通して学んだことについて記述している文章を抽出した結果、351のローデータが抽出され、内容の類似性により20のサブカテゴリーに、さらに4つのカテゴリー『外来看護の役割と機能』、『看護専門職者に求められる知識・技術・態度』、『コミュニケーション技法』、『外来患者の心理』に分類された(表2, 表3)。『外来看護の役割と機能』は「診察や処置がスムーズに行われるように準備・後片付けをする」、「患者が安心して診察が受けられるように気遣いや配慮をする」、「検査などについて患者にわかりやすく説明する」、「受付で重症度の判断や診療科の振り分けをする」、「安全な診療を受けられるための環境整備をする」など14のサブカテゴリーから構成された。『看護専門職者に求められる知識・技術・態度』は「看護師に求められるコミュニケーション技術とその重要性を学んだ」、「看護師には援助についての観察力と瞬時の判断力が求められる」など4つのサブカテゴリーから構成された。『コミュニケーション技法』は「患者とコミュニケーションを図り技法を学んだ」というサブカテゴリーから、また、『外来患者の心理』は「心配や不安を抱えている患者の気持ちがわかった」というサブカテゴリーから構成された。

表2 外来実習の学び

() 内の数字はローデータ数を示す。

カテゴリー	サブカテゴリー
外来看護の役割と機能 (234)	<p>診察や処置がスムーズに行われるように準備・後片付けをする (51)</p> <p>患者が安心して診察が受けられるように気遣いや配慮をする (30)</p> <p>検査などについて患者にわかりやすく説明する (26)</p> <p>受付で重症度の判断や診療科の振り分けをする (23)</p> <p>安全な診療を受けられるための環境整備をする (20)</p> <p>点滴や輸血などを安全に実施する (17)</p> <p>病院内のスタッフ間の連携を図る (17)</p> <p>医師に患者情報を伝達する (10)</p> <p>診察や処置がスムーズに行われるように介助する (10)</p> <p>患者がセルフケアできるように助言・指導する (10)</p> <p>患者だけでなく患者の家族にも配慮する (8)</p> <p>診察中の患者のプライバシーに配慮する (5)</p> <p>診察時に患者の代弁者となる (5)</p> <p>病院内だけでなく地域との連携を図る (2)</p>
看護専門職者に求められる知識・技術・態度 (92)	<p>看護師に求められるコミュニケーション技術とその重要性を学んだ (35)</p> <p>看護師には援助についての観察力と瞬時の判断力が求められる (29)</p> <p>専門的知識から社会保障制度まで広範囲の知識が求められる (16)</p> <p>看護学生としての自覚と責任を見直した (12)</p>
コミュニケーション技法 (16)	<p>患者とコミュニケーションを図り技法を学んだ (16)</p>
外来患者の心理 (9)	<p>心配や不安を抱えている患者の気持ちがわかった (9)</p>

表3 外来実習の学びについての主なローデータ

() 内の数字はローデータ数を示す。ローデータは学生の記述をそのまま抽出したもの。

サブカテゴリー	主なローデータ
外来看護の役割と機能	診察や処置がスムーズに行われるように準備・後片付けをする (51)
	患者の呼び出しや誘導をしたり、医師のところへカルテをまわしたり、医師が患者の処置をするときの準備や後片付けをして、外来がスムーズに機能するために働いていることを学んだ。
	診察室内でいかに効率よく作業できるかを考えて物の位置をかえる。
	スムーズに診察できるように、予めカルテを見て患者の処置に必要な物品をそろえていた。
	診察の順番も個人にかかる時間を予想し、スムーズにいくように並べていた。
	患者が安心して診察が受けられるように気遣いや配慮をする (30)
	診察が遅れている事情を外来患者ひとりひとりに説明し、常に周囲を気にかけていた。
	再来の患者さんは顔や名前を覚えて待ち時間で声かけをしていることを学んだ。
	診察室という独特の緊張感や不安を取り除くために笑顔でいた。
	初診の患者さんは病院のしくみなどがわからずに戸惑うことも多く、看護師が自ら患者さんに話しかけることが大切であると感じた。
	検査などについて患者にわかりやすく説明する (26)
	医師から受けた疾病や治療の説明を理解しているのかを確認し、必要に応じて補足する。
	病気や処方する薬の効果・副作用、レントゲンや検査数値等の説明をするときは図を書いたりわかりやすい言葉で丁寧に説明していた。
	受付で重症度の判断や診療科の振り分けをする (23)
	患者の重症度の把握、熱がある患者にはマスクの配布、診察の流れの説明、診察時に必要な計測、バイタルサイン確認などを行っている。
	患者さんの症状ごとに専門の医師への振り分けを行っていた。
	安全な診療を受けられるための環境整備をする (20)
	待合室や診察室に危険な所はないかを確認し、危険な所は早急に改善し、患者さんにとって安全な環境を作っていることも学んだ。
	感染防止や清潔に保つために徹底した手洗いが行われていた。
	処置室において環境整備をし、常に環境を清潔に保ち院内感染を防ぐことも重要である。
点滴や輸血などを安全に実施する (17)	看護師は処置を行う前には必ず氏名と生年月日を患者本人に確認していた。
	輸血を始めてからは副作用・刺入部・滴下状態・脈拍などを確認していた。
病院内のスタッフ間の連携を図る (17)	処置中の患者の状態や治療の進行状況をタイマーを鳴らし誰もが気づけるようにしたり、患者をチェックした人・時間を記すなど工夫がなされていた。
	医師や事務、検査部などと連絡を取り合い、入院がスムーズに行われるように調整していた。
医師に患者情報を伝える (10)	医師がより迅速で正確に診断できるように、患者さんの状態を把握し、診察の前に伝えていた。
	診察前に患者さんと直接話しをし、表情や精神的な状態を医師に伝えておくことで医師の診察の参考になることが学べた。
診察や処置がスムーズに行われるように介助する (10)	医師に言われるより先に治療に必要なものは準備し、診察途中でも必要物品はすぐに用意し、先読みしてサポートしていた。
	処置中の医師への処置器具の受け渡しや、患者さんの移乗の手伝いをこなしていた。
患者がセルフケアできるように助言・指導する (10)	処置中の会話を通して生活面においても情報を収集し、日常生活の中でどのような点に支障をきたすかを考え、理解した上で患者にアドバイスをしていた。
	血圧が高めの患者さんには血圧手帳を配り、毎日血圧を測り記入するように指示する。
患者だけでなく患者の家族にも配慮する (8)	患者さんだけでなく、付き添いの家族にも精神面のケアをしたり、診察室にイスを用意することも大切であり、付き添いの家族にも配慮していることが学べた。
	不安なのは患者だけでなく家族もなので、両方の質問や気持ちに答えないとならない。
診察中の患者のプライバシーに配慮する (5)	診察時はプライバシーの侵害に注意して、必要な配慮を行う。
	診察時にズボンや下着姿にならないとときにはタオルをかけ羞恥心を与えないようにしていた。
診察時に患者の代弁者となる (5)	患者が医師に伝えたいことを伝える。
	相談にのって医師と患者間の仲介の役割も果たしていた。
病院内だけでなく地域との連携を図る (2)	患者さんに通いやすい地域の病院を紹介したり、地域とも連携を行っていることがわかった。
	紹介状に返事を返し、患者さんのその後の経過を報告して連携をとっている。

サブカテゴリー	主なローデータ		
看護専門職者に求められる知識・技術・態度	看護師に求められるコミュニケーション技術とその重要性を学んだ (35)	患者さんの理解度や知識にあったコミュニケーションの仕方、情報収集の仕方が大切である。 カルテにあることが全てではないので聴きだす工夫をして必要な情報を得ていた。 患者さんの会話から決して否定せず、こうしようかと話す話し方がよいと学んだ。 患者本人を中心とした周りの環境や家族との関係も視野に入れた声かけが大切だと思った。 外来にきている患者さんは不安を抱えているため、その不安を取り除くためにしっかり主訴を聞くことが大切であると感じた。 親身になって話しを聞いてくれる看護師の心遣いが、また明日から頑張ろうという意欲を奮い起こしてくれるという点で、看護師の患者さんへのコミュニケーションが大切である。	
	看護師には援助についての観察力と瞬時の判断力が求められる (29)	指示待ちをしているのではなく、周りをよく見て判断することが必要であり、そのために観察することがとても大切だと思った。 看護師一人ひとりが優先順位を考え、判断しながら動いていると感じた。 処置の間に、次に医師が何が必要なのかを素早く判断し用意しておかなければならない。 外来の看護師は、カルテや問診票から瞬時に患者さんの状態を把握し、どんなことに気をつけ、どんなことを観察し、どんな情報をえればいいのかを判断しなくてはいけないので、てきぱき動ける行動力や鋭いアセスメント能力が必要であることを学ぶことができた。 診察に介助が必要な人がいるかどうか、カルテから患者さんの状態を予想し、こんな不安を持って診察にきているのではないかとというように前もって予測しておくことも大切である。	
	専門的知識から社会保障制度まで広範囲の知識が求められる (16)	たくさんの知識をもって初めてよいコミュニケーションや情報収集ができ、それと共にサポートやアドバイスができると痛感した。 保険について聞かれることもあるため、社会福祉制度などさまざまな知識を兼ね備えておかなければならない。 さまざまな器官の診察・治療が行われるため、治療法や薬もさまざまである。看護師は患者さんに説明・処置を行うことがあるため、幅広い知識と技術が必要であることも実感できた。	
	看護学生としての自覚と責任を見直した (12)	患者が自分のかかっている病気についてよく調べていて、勉強不足を痛感させられた。 患者さんからは看護師として見られ、場所や手順などいろいろなことを聞かれ、もっと看護師としての自覚と責任を持たなければならぬと感じた。 自分の体調管理は患者さんを守るためにも自分を守るためにも注意しなければならない。 些細なことでも不快な気持ちにさせてしまうので、意識して身だしなみに注意することが大切だと感じた。	
	コミュニケーション技法	患者とコミュニケーションを図り技法を学んだ (16)	患者に対する先入観にとらわれず、患者のイメージや予測の中で、コミュニケーションや日々の記録を照らし合わせて情報を得ることが大切だと感じた。 一語ずつ大きな声でゆっくり聞きやすく話しをすることや、周りに大勢の人がいないなど話しやすい環境に整え、患者の反応や表情、タイミングに注意しなければならない。 はじめどこまで深い話しをしていいのかわからず戸惑ってしまったが、だんだん患者さんをみて判断できるようになった。 話しやすい環境を作るためには、患者さんが好きなことについて話すことが大切であり、好きな話の中に、いかに疾患に関する話を織り込むかが重要であると学んだ。 そばにつき、話をきくことで患者さんの不安・心配が軽減されるということも実感できた。
	外来患者の心理	心配や不安を抱えている患者の気持ちがわかった (9)	外来にくる患者さんの気持ちには、検査に対する不安や結果に対する不安がある。 何らかの不調があって病院にきていて、原因がわからない場合もあり、とても不安でいる。 電子器具は便利な反面、高齢の患者さんが使い方がわからず戸惑っている姿も多く見られた。 目の疾患のため周囲の様子がわかりにくいことからくる不安や、見えなくなってしまうのではないかと心配が大きいために不安を抱えている。 自分の疾患にとっても前向きな姿勢で受け入れていても、ふとしたときに死が頭の中をよぎったり、今の治療や禁煙に意味がないと思えるときがあることがわかった。

IV. 考察

1. 外来看護の役割と機能についての学び

ローデータから抽出された4つのカテゴリーは、本実習の主たる目的と合致しており、学生は実習目標を捉えることができたと考える。特に外来看護の役割と機能に関しては記述件数も多く、看護師が患者の呼び出しや誘導をしたり、予めカルテを見て患者の処置に必要な物品を揃えたり後片付けをするなど、外来診療がスムーズに機能するために働いていることを学んでいる。また、受付で重症度の判断や診療科の振り分けをしたり、患者が安全な診療を受けられるために環境整備を行うことや、外来患者一人一人に話しかけたり、医師から受けた疾病や治療の説明の理解度に応じて補足説明するなど、患者が安全に安心して診察が受けられるような援助や心理的な配慮についても学んでいる。このように、学生は2日間の見学実習を通して外来看護師の行動をよく観察し、病棟とは異なる外来看護師の役割や診療過程における患者への関わりについて学んでいることがわかった。また、学生は患者と受診過程をともに同行する中で、看護の役割について患者の立場からも理解していることが伺えた。

2. 看護専門職者に求められる知識・技術・態度についての学び

桜井らは初期体験実習で学生は看護職の魅力を感じ、専門的技術及び知識の習得や、多くの経験から豊かな人間性を形成することの必要性を感じ、それが学習意欲につながっていると述べている³⁾。また、山口らは学生は看護師の援助を観察することから看護師の役割について学び、将来の看護師像を具体的な目標に転換することによって看護学生としての自覚とその後の学習意欲が向上すると述べている⁴⁾。その他、外来実習を含めた基礎看護学実習の実習効果としては、看護のイメージ化、動機の強化、生活改善の意欲向上、自己の課題の明確化、学習意欲の向上が報告されている^{5)~8)}。

本研究の結果からも、専門的知識から社会保障制度まで看護実践に必要な広範囲の知識の理解と活用、観察力と瞬時の判断力の的確性、高いコミュニケーション技術がなければ専門職としての看護実践はできないことを学生は看護師の活動を見学することを通して学んでいる。そして、看護専門職者に求められる知識・技術・態度が具体的になる一方で、看護学生としての自覚を再認識するとともに目標への志向性を高める記述も見られ、先行研究と同様の効果が確認できたと考える。

3. コミュニケーション技法についての学び

学修初期に導入されている基礎看護学実習で学生は初めて患者と関わることになり、学生それぞれは患者とのコミュニケーションの取り方に戸惑い悩みながら、患者との関係形成について感じ、考え始めると言われている⁹⁾。また、学生の記述する実習上の悩みと困難点で最も多いのは患者とのコミュニケーションであり、患者との関係作りやコミュニケーションの達成度が実習成果とも大きく関係するという報告も多くみられる^{10)~13)}。

本研究結果においても、学生のコミュニケーションに係る記述は多く、コミュニケーションに不安も大きいのが、それ故に強い関心をもって実習に取り組んでいることが推察された。その中で、学生の記述内容は看護師のコミュニケーション場面の見学から学んだことと、学生自身の患者との会話の体験からの学びに大別された。

学生は患者と看護師のコミュニケーション場面を見学する中で、カルテにあることが全てで

はないので聴き方の工夫をして必要な情報を得ることや、患者の会話は否定せずに具体的な提案をする等の話し方が適切であることや、患者の知識の程度や理解度にあったコミュニケーションの仕方、情報収集の仕方が大切であるなど、患者との関係性を構築し、患者を理解するためのコミュニケーションの具体的な技法や個別性について学んでいる。また、患者の不安を軽減するために主訴を聞くことが大切であることや、親身になって話を聴く看護師の心遣いが患者の意欲を奮い起こすなど、看護師の行う患者へのコミュニケーションのさまざまな目的やその重要性について学んでいることがわかった。

これらの患者と看護師のコミュニケーション場面からの多くの気づきが学生自身のコミュニケーション技術を高めていく上での動機づけとなっており、実際に学生が一人の患者とコミュニケーションを図る中で、患者の理解力を考え一語ずつ大きな声でゆっくり聞きやすく話しをすることや、話しやすい環境に整えることの重要性を学んでいる。また、患者との関わりのはじめの段階ではどこまで深い話をしていいのかわからず戸惑っていたが、徐々に患者の反応や表情、タイミングをみて判断できるようになったり、患者のそばで話を聴くことで不安・心配が軽減されるということがわかるなど、コミュニケーションの技法や重要性について実感を伴いながら学んでいることがわかった。

4. 外来実習における教育上の課題

鶴田らは学生が実習中の様々な体験を通して看護というものをどのように感じ、受け止め、学びとしているかに敏感になりながら実習を進行させることが重要であると指摘している¹⁴⁾。また、長谷川らは学生の学びの特徴としてその場面に遭遇しても介入が難しい場合には考えを深められないことや看護師が判断して行動していることなど学生には見えていない状況のものも多いことを指摘している¹⁵⁾。

本研究結果においても、学生一人一人の記述数、観察した事実の具体的な記述内容、事実を通して考えた看護についての記述内容の程度には差がみられた。これらは、診療科によって科の特徴や見学内容も異なるため学生の学びには格差があることや学生の観察の偏りや表現力なども影響していると推察される。学生が観察した事実、気づきや体験に対して、看護としての意味を共に考えることで学生の学びを強化していくことが課題である。

また、近年、慢性疾患の増加、在院日数の短縮、患者の価値観の多様化、医療の進歩による外来治療の増加等に伴い外来診療は多機能になり、対象も重症化、複雑化している¹⁶⁾。外来看護には、限られた時間の中においても、従来の診療の介助のみならず、専門的な知識・技術が必要とする治療の看護や、対象の多様化するニーズに気づき、健康回復・維持増進をめざして個々の生活に合わせた看護を提供する役割が一層期待されている。このような社会情勢の変化による外来看護へのニーズに学生が気づける関わり方も今後の課題となる。

以上のような課題をふまえ、外来実習での学びをさらに深めるために、教員は実習指導者との調整を図り教育環境を整えることが必要であると考ええる。

V. 結語

本研究は、学生の外来実習のレポートから実習における学びの内容を明らかにした。外来で行われている看護師の看護場面の見学実習や、患者の受診過程に伴いコミュニケーションを図る実習を通して、『外来看護の役割と機能』、『専門職者に求められる知識・技術・態度』、『コミュニケーション技法』、『外来患者の心理』などを学習することができていた。

謝辞

本研究の趣旨を理解し、貴重な資料を提供してくれた学生の皆様に心よりお礼を申し上げます。また、限られた時間と環境の中で効果的な実習ができるようにご支援とご指導をくださった実習施設の指導者の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 滝下幸栄, 岩脇陽子, 松岡知子他. 基礎看護学実習Ⅱの評価と課題. 京都府立医科大学看護学科紀要. 2008; 17: 93-99.
- 2) 吉田礼子. 看護基礎教育における到達目標—臨床看護学へ繋がる基礎看護学の考え方と展開—. 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集. 2004; 14: 10-22.
- 3) 桜井礼子, 山口真由美. 看護教育における初期体験実習の経験と意義. 大分看護科学研究. 1999; 1(1): 2-6.
- 4) 山口智子, 上野範子, 緒方巧他. 初回基礎看護学実習のレポートの分析(その1)—早期体験学習の学習効果に焦点をあてて—. 藍野大学医療保健学部看護学科紀要. 2007; 21: 83-92.
- 5) 石渡啓子. 基礎看護学実習における学生の学び—実習効果に焦点を当てて—. 高崎健康福祉大学紀要. 2005; 4: 125-139.
- 6) 大浦まり子, 野口純子, 淘江七海子他. 基礎看護学実習Ⅰ—①レポートの内容分析. 香川県立医療短期大学紀要. 1999; 1: 61-69.
- 7) 大下静香, 矢口みどり, 大森武子. 臨地実習—本当の学習がそこから始まる. 看護教育. 1998; 39(6): 435-440.
- 8) 杉本幸枝, 土井英子, 石本傳江. 基礎看護学一日実習における効果と課題—学生の実習記録の内容分析を通して—. 新見女子短期大学紀要. 1998; 19: 137-148.
- 9) 佐藤美紀, 大島弓子, 小松万喜子他. 患者との人間関係形成の初期段階における学生の主観的評価とその理由—基礎看護学実習の体験を通して—. 愛知県立看護大学紀要. 2006; 12: 17-22.
- 10) 岩脇陽子, 滝下幸栄, 今西美津恵他. 早期体験学習としての基礎看護学実習の学習効果と実習満足度に関連する要因. 京都府立医科大学看護学科紀要. 2008; 17: 31-39.
- 11) 滝下幸栄, 岩脇陽子, 松岡知子他. 基礎看護学実習Ⅱの評価と課題. 京都府立医科大学看護学科紀要. 2008; 17: 93-99.
- 12) 高橋有里, 菊池和子. 基礎看護学実習における学生の患者とのかかわりに関する検討—実習成果を否定的に捉えていた—学生の分析から—. 岩手県立大学看護学部紀要. 2000;

2：145-156.

- 13) 永田まなみ. 臨地実習における看護学生的心情の一考察. 看護教育. 2000；41(4)：278-284.
- 14) 鶴田晴美, 小笠原映子. 基礎看護学実習における看護学生の経験とその意味づけ. 高崎健康福祉大学紀要. 2005；4：65-76.
- 15) 長谷川桂子, 石井康子. 小児科外来実習からの学生の学び. 岐阜県立看護大学紀要. 2007；8(1)：11-18.
- 16) 廣川恵子, 大久保八重子, 植田喜久子. 看護実践から見出した外来看護師の能力. 日本赤十字広島看護大学紀要. 2008；8：21-29.

Achievements and Challenges of Basic Clinical Nursing in Outpatient Practice

Nobuko SUNAMI, Natsuko KITAMURA, Kazuko HONDA, Michiyo KAJIWARA,
Yumi TAKADA, Machiko MURAMATSU, Mitsuko SATO, Akiko MATSUDA

Department of Nursing, Faculty of Medical Technology, Teikyo University

Abstract:

The purpose of the study was to investigate the achievement of outpatient practice and clarify the future training issues for basic clinical nursing education. The clinical practice records and reports obtained from 120 students nurses were analyzed using content analysis methods.

Resulting 351 row data derived the following four categories, namely, "Outpatient Nursing Roles and Functions", "Attitude, Knowledge and Skills Required for Nursing Profession", "Communication Skills", and "Outpatient Psychology". As specified in the course objectives, students were able to learn the role and function of outpatient nursing care and the importance of the professional observation and judgment. Students also learned the communication skills in nursing, which would encourage them to participate in the active nursing at bed-sides.

It was suggested that we must provide the opportunity for students to learn from different experiences in nursing practice. Needs awareness education should be encouraged further for them to be responsive to outpatient nursing due to any significant societal changes.

Keywords: basic clinical nursing practice, outpatient practice, nursing student,
student's report